

○教員養成に携わる専任教員が有する学位及び業績・担当科目

教職課程教員一覧



藤本 敦夫（ふじもと あつお）教授

担当科目

教職入門Ⅰ      教職入門Ⅱ      教育学概論Ⅰ      教育学概論Ⅱ  
 生徒指導論Ⅱ（進路指導を含む。）      教育実習の指導      教育実習 A      教育実習 B  
 教職実践演習（中・高）      教育学特論

所属・職位	大阪音楽大学 音楽学部 音楽学科 教授
学位	京都大学教育学修士
学歴	1982（昭和 57）年 京都大学教育学部卒業（教育社会学科教育行政学専攻） （教育学士） 1985（昭和 60）年 京都大学大学院教育学研究科修士課程修了 （京都大学教育学修士：教修第 481 号） 1988（昭和 63）年 京都大学大学院教育学研究科博士後期課程学修認定（学修認定） 1991（平成 3）年 京都大学大学院教育学研究科博士後期課程満了退学
主な職歴	1988（昭和 63）～2009（平成 21）年 親和女子大学非常勤講師 1994（平成 6）～1995（平成 7）年 大阪音楽大学短期大学部専任講師 1995（平成 7）～2006（平成 18）年 大阪音楽大学短期大学部助教授 2007（平成 19）～2010（平成 22）年 大阪音楽大学短期大学部准教授 2011（平成 23）年 大阪音楽大学短期大学部教授 2012（平成 24）年～大阪音楽大学音楽学部教授（現在に至る）
専攻（専門分野）	教育行政学、教育法規、教育制度、教師論、教員養成制度等
担当科目	「教職入門Ⅰ」「教職入門Ⅱ」「教育学概論Ⅰ」「教育学概論Ⅱ」「生徒指導論Ⅱ（進路指導を含む）」「教職実践演習（中・高）」
研究テーマ	青年期教育制度論、地方教育行政研究、教育と人権、最近は大学生論や若者文化への社会的アプローチ等に関心があります。
教育方針	「既存の教育のあり方に対する疑問」というのが、僕が教育学分野を専攻したそもその動機です。これまでの教育の世界の「思い込み」を排し、自分なりの授業のあり方・学生との接し方を考えてきたつもりです。指導方針の基本は「学生を大人として（あるいは大人になることを期待して）接する」「学生を信頼する」「学生に自由とそれに見合った責任を課す」といったところでしょうか。

所属学会・団体等	、日本教師教育学会、日本臨床教育学会
<p>最近の業績</p> <p>教育実践記録等</p>	<p>■「教員養成における短期大学の役割と可能性～大阪音楽大学短期大学部を事例として」(日本教師教育学会課題研究会『課題研究Ⅲ：教師教育の高度化 研究報告書』) 2014 (平成 26) 年 9 月</p> <p>近年の教師教育の「高度化」の動向の中でともすれば軽視されがちな短期大学部における二種免許状課程の意義と実績を明らかにしようとしたものである。</p> <p>■「教師像における「教養」の意義」(『大阪音楽大学教育研究論集 創刊号』)2014 (平成 26) 年 2 月</p> <p>近年の教員養成制度改革に関わる各種政策文書の分析を通じ、そこで求められている教師像や資質能力の変化を批判的に検討した。近年の政策文書が求める「教養」の中身が狭い職能的教養に矮小化されていることを指摘するとともに、教員の資質として「幅広い教養」を再評価すべきことを問題提起した。また、音楽大学の学生に読まれることも意識して、シューベルトの歌曲『魔王』の教材研究にあたって必要なアプローチを事例として取り上げた。</p> <p>■「教職を含むさまざまな人生選択～大阪音楽大学短期大学部『教職入門』における授業実践」(『阪神教協リポート No.37』)2014 (平成 26) 年 3 月</p> <p>本学の「教職入門」は、学生と比較的年齢の近いさまざまな職業・個性を持つ卒業生を特別講師に招いての講義が魅力となっている。学生の現状分析や学修ニーズを踏まえての授業デザインの実例としての意義もあると思われる。</p> <p>■「大学改革と教員養成制度改革をめぐる論点」(『阪神教協リポート No.36』)2013 (平成 25) 年 2 月</p> <p>2012 年 8 月の中央教育審議会の日本の答申の比較分析を行い、教員養成制度改革を単独で進めるのではなく、大学教育の「質保障」を優先させつつそれと連動し構想すべきと考え、課題を提起した。</p> <p>■「教師教育と大学の役割～大阪音楽大学教員免許状更新講習(共通必修領域)の経験を総括して」(『大阪音楽大学研究紀要 第 50 号』) 2012 (平成 2) 年 3 月</p> <p>本学の更新講習は、受講者による事前の課題意識アンケートの分析を踏まえて、受講者のニーズを掘り起こし、それに応えるという筋道で講習内容も毎年更新している。その経験を踏まえて、大学が現職教育に果たしうる新たな役割を考察した。</p> <p>■「教育改革と生徒指導—教育制度の全般的道德教育化」(『大阪音楽大学研究紀要 第 49 号』) 2010 (平成 22) 年 12 月</p> <p>2006 年の教育基本法改正、2007 年の学校教育法大改正、2008 年の学習指導要領改訂という一連の教育改革の全体像を俯瞰しつつ、2010 年の『生徒指導提要』に至る生徒指導の厳格化の動向を分析した。</p> <p>■「教職に関する意識調査」(喜多忠正、角谷史孝と共著『大阪音楽大学研究紀要 第 47 号』) 2008 (平成 20) 年 12 月</p>

	<p>本学教職課程履修者を対象に教職科目が受講生の教員志望意欲にどのような影響を与えているか、また、それらの変化と履修者のバックグラウンドとの相関について分析し、教職課程カリキュラム充実のための課題を探った。</p> <p>[テキスト、資料集等]</p> <p>『教育改革の動向/学習指導要領改訂の動向』（大阪音楽大学教員免許状更新講習 共通必修領域テキスト 増補版）2014（平成 26）年 7 月</p> <p>2009 年以來、毎年最新の教育時事に関する補論を増補し、受講者のニーズに応えている。A \$ サイズ約 60 ページ。</p> <p>『解説資料 教育改革と教育法規 2014 年版』2014（平成 26）年 4 月</p> <p>2000 年以後毎年改訂。最新法規と教育時事を盛り込んだ資料集。授業の他、各種講演等でも使用。</p> <p>その他 「授業力」や「教材づくり」について定評があり、学生による授業評価アンケート並びに教職部会による教職課程履修学生の意識調査においても評価が高い。教員採用試験対策学習会やクラブ活動の顧問も引き受けるなどの課外活動の支援に取り組んでいる。また、日常的な学生とのコミュニケーションやさまざまな学生相談を通じて教職課程履修学生以外の学生の信頼も厚い。このことが評価されて平成 18 年度-21 年度の二期四年間、学生部長に任じられるなど、担当授業以外でも教育力・指導力を発揮している。また、ライブハウスやカフェ等と交渉し会場費無料のコンサートを開催し、経済的負担なしに発表する場を学生に提供するなど、学生の演奏活動の支援も活発に行っている。</p> <p>全国私立大学教職課程研究連絡協議会 特別委員会「教員養成制度検討委員会」委員ならびにワーキング・グループメンバー（2012（平成 24）年 5 月～現在）</p> <p>全国私立大学教職課程研究連絡協議会 教員養成制度検討委員会編『教員養成制度改革資料集 2』編集委員（2014（平成 26）年）</p> <p>2008（平成 20）年 厚生労働大臣指定 （社）全国柔道整復学校協会主催 柔道整復師専科教員認定講習講師 「教育行政」「教育方法」</p> <p>2011（平成 23）年 厚生労働大臣指定 （社）全国柔道整復学校協会主催 柔道整復師専科教員認定講習講師 「教育行政」「教育方法」（2015 年（平成 27）年 10 月まで）</p>
--	---



橋本 龍雄（はしもと たつお）教授

担当科目

教職入門Ⅰ 教職入門Ⅱ 音楽科指導法Ⅱ 音楽科指導法A（創作）  
 音楽科指導法B（創作） 特別活動の指導法 教育実習の指導 教職実践演習（中・高）

所属・職位	大阪音楽大学 音楽学部音楽学科 教授
学位	修士（教育学）
学歴	1978(昭和 53)年 大阪教育大学教育学部保健学科小学校課程卒業 1994(平成 6)年 大阪教育大学大学院教育学研究科修士課程音楽教育専攻音楽科教育学専修 修了
主な職歴	1978(昭和 53)～1988(昭和 63)年 大阪府寝屋川市立明和小学校教諭 1988(昭和 63)～1996(平成 8)年 大阪府寝屋川市立梅が丘小学校教諭 1994(平成 6)～2000(平成 12)年 大阪教育大学非常勤講師（兼業） 1996(平成 8)～2000(平成 12)年 大阪府四条畷市立四条畷小学校教諭 2000(平成 12)～2001(平成 13)年 大阪教育大学非常勤講師 2000(平成 12)～2007(平成 19)年 福井大学教育地域科学部芸術・保健体育教育講座 助教授 2001(平成 13)年 奈良教育大学大学院教育学研究科非常勤講師 2002(平成 14)年～2014(平成 26)年 大阪音楽大学非常勤講師 2002(平成 14)年～現在に至る 大阪音楽大学短期大学部非常勤講師 2005(平成 17)～2006(平成 18)年 放送大学非常勤講師 2007(平成 19)年 福井大学教育地域科学部芸術・保健体育教育講座 准教授 2007(平成 19)～2014(平成 26)年 福井大学教育地域科学部芸術・保健体育教育講座 教授 2008(平成 20)～現在に至る 大阪音楽大学指導者研修講師 2010(平成 22)年 放送大学非常勤講師 2015（平成 27）年 4月～現在に至る 大阪音楽大学音楽学部音楽学科 教授
専攻（専門分野）	音楽教育学、授業実践論、教材開発
担当科目	「教職入門Ⅰ」「教職入門Ⅱ」「音楽科指導法Ⅱ」「特別活動の指導法」「教育実習の指導」「教職実践演習（中・高）」
研究テーマ	古代楽器「土笛」を用いた総合的実践研究 小・中学校における教材開発 授業におけるコミュニケーション（特にノン・バーバル・コミュニケーション）

教育方針	<p>1.自分のことは自分で考え、行動に移すことを重視する。</p> <p>2.自身が問題点を見つけ、それを解決するために試行錯誤しようとする姿勢を高く評価する。</p> <p>3.結果よりプロセス重視。</p>
所属学会・団体等	日本学校音楽教育実践学会
最近の業績	<p>著書</p> <p>■『学習指導要領&amp;音楽のおくりもの』（共著）2014（平成26）年5月教育出版 平成27年度より新しい小学校音楽教科書を使用するに当たり、学習指導要領における共通事項や歌唱指導、器楽指導、鑑賞指導、音楽づくりをどのように考えて授業を進めるべきか。学習指導要領の具体的な教科・指導内容とをリンクさせて解説・詳述した。（p.p.1～12）長島真人、橋本龍雄 共著。</p> <p>■『楽しく基礎が身に付く！新しい授業アイデア集』（単著）2014（平成26）年4月教育出版 子どもを前にして、教えるべき「指導内容」を、どのようなことば掛けから授業を始め、子どもとのやりとり（コミュニケーション）をどう進めればよいのか。これまで教師当人任せになっていた部分を、映画や芝居と同じ「脚本」という形で文字に著した。「脚本」を徹底的に読み込むことによって、音楽が苦手な教師であっても、具体的な授業のイメージを持つことができる。1年生から6年生まで学年毎計7つの基礎的な指導内容の「脚本」を設定した。書名の「新しい」の所以がここにある。</p> <p>■『世界楽器めぐり 進め！ドレミ隊』（監修）2012（平成24）年7月～2013（平成25）年3月 朝日学生新聞社 朝日小学生新聞毎週水曜掲載、全39回 日本を含む世界の諸民族の楽器 150種類を、「音楽室の楽器、バンドの楽器、民族楽器、オーケストラの楽器、日本の楽器」の項目に「吹く、打つ、弾く、こする、振る」の奏法を分け、楽器の特徴や構造、ルーツや伝播の歴史、楽器が生まれる現地の人々の生活、学校教育への利用等を小学生にわかる言葉と文章で解説・紹介した。 監修として、楽器学・音楽学・文化人類学および音楽教育学の最新の研究成果を踏まえて、掲載する楽器の詳細な資料を作成すると共に、原稿の最終校正を行った。 執筆は資料を元に記者3名（水野麻衣子、猪野元健、駒形麻弓）が本文を、絵本作家（新井洋行）が4コマイラストを担当した。</p> <p>■『楽しいリコーダー』（共著）2011（平成23）年1月 教育出版 小学校3年生（リコーダー導入期）からのリコーダー教則本として、執筆・編集した。進度は他に類がない程ゆっくりと設定し、各々の練習曲を子どもなりに十分に楽しんで演奏できるような工夫（手拍子や歌と一緒に演奏したり、伴奏なしでもアンサンブルが楽しめるような編曲、「ラーメン一丁」のような身近な話題の作品、「あの丘に続く道」「風の応援団」等の様々なイメージが持てる題名、学習初期に単旋律で演奏した曲が、後期には二重奏で登場する等）を凝らして編集した。掲載曲全50曲。（p.p.1～40）金子健治、橋本龍雄</p> <p>■『新訂版 小学校音楽科の学習指導-生成の原理による授業デザイン-』（共著） 2011（平成23）年11月 曠濟堂あかつき 先に発行した拙著の内容を全面改訂し、「自ら学び自ら考える力」を育てるために有効な「生成の原理」を枠組みに、教科の目標・指導内容、指導計画、授業の実践、評価・評定など、小学校音楽科の授業を展開する際や教員養成において必要になるすべての内容を詳述した。</p>

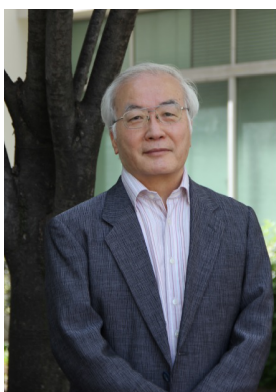
	<p>分担部分は、「Ⅲ音楽科目の指導計画 1.年間指導計画の作成」。</p> <p>指導内容に焦点を当てて、年間指導計画を作成するには何をどのように考え、何を準備し、どのような手順で、どう書いていけばよいのかを具体的事例を挙げて詳細に述べた。</p> <p>改訂に当たり、平成 27 年度より小学校音楽教科書の発行元が、2 社（教育出版、教育芸術社）に減ることが明らかになったので、年間指導計画の基本事例を 2 社の教科書を前提に書き改めた。（p p.35～38）</p> <p>執筆者：小島律子、西園芳信、橋本龍雄、田中龍三、松永洋介、松本絵美子、宮下俊也、吉村治広、小川由美、斎藤百合子、坂本暁美、牧野利子、衛藤昌子、井上薫、笠井かほる、金指初恵、楠井晴子、小林佐知子、島川香織、清水美穂、高橋澄代、竹内悦子、寺田巳保子、董芳勝、廣津友香、松本康子、矢部朋子。</p> <p>■『小学校音楽科教育法-創造あふれる音楽活動のために-』（共著）2009（平成 21 年）4 月教育出版</p> <p>小学校音楽教師の養成に役立つ基本的な考え方や具体的な実践を紹介し、音楽科教育に関する基礎知識を解説するとともに、指導案の書き方、指導のポイント、指導の具体例など実践的な内容を盛り込んだ。</p> <p>分担部分は、「第 7 節『楽器づくり』でひろく音楽活動。</p> <p>楽器づくりを中心とした音楽活動は自分の楽器を作り、音の発見や探究を通して音楽をつくり、記譜し、演奏し、批評・鑑賞する一連の音楽活動すべてを体験することに意義があることを、具体的事例を基に詳述した。（p p.134～140）</p> <p>執筆者：宮野モモ子、本多佐保美、橋本龍雄、中島寿、島崎篤子、中嶋俊夫、伊藤誠、徳田崇 他 15 名。</p> <p>■『小学校音楽科の学習指導-生成の原理による授業デザイン-』（共著）2009（平成 21）年 2 月 曠済堂あかつき</p> <p>「自ら学び自ら考える力」を育てるために有効な「生成の原理」を枠組みに、教科の目標・指導内容、指導計画、授業の実践、評価・評定など、小学校音楽科の授業を展開する際や教員養成において必要になるすべての内容を詳述した。指導案事例は、歌唱・器楽・音楽づくり・鑑賞・表現と鑑賞の関連の全活動分野を網羅した。</p> <p>分担部分は、「Ⅲ音楽科目の指導計画 1.年間指導計画の作成」。</p> <p>指導内容に焦点を当てて、年間指導計画を作成するには何をどのように考え、何を準備し、どのような手順で、どう書いていけばよいのかを具体的事例を挙げて詳細に述べた。（p p.32～36）</p> <p>執筆者：小島律子、西園芳信、橋本龍雄、宮下俊也、松永洋介、吉村治広、松本絵美子、齋藤百合子、田中龍三、寺田巳保子、衛藤昌子、小川由美、井上薫 他 17 名。</p> <p>■『New Type Ensemble of Music ケチャ・パーティー』（編著）2007（平成 19）年 6 月教育出版</p> <p>これからの学校における音楽教育は、「創作」が鑑賞とからめてかなり重視されることになる。それに対応する教材集として、「音楽の構造」に焦点をあてて選曲・編曲・編集を行い、創作活動へのヒントを盛り込んだ内容の新しいタイプのアンサンブル曲集を作成した。</p> <p>また後半のベーシック・エチュードは、ピアノ伴奏譜付きのオリジナル作品 9 曲(主に小学 1 年～4 年生対象)を掲載した。（南山萌および里山萌は橋本龍雄の筆名。）</p> <p>曲名はレッツゴーパーティー、「ケチャ」のりずむ、魔法のフルーツバスケット、くいしんぼうのラップ、は・や・く・ち ラップ、ケチャ・パーティー、はやしことばメドレー、瓜売りの声、蛙と馬と福助</p>
--	--

<p>学術論文等</p>	<p>と、日本民謡づくし、スナップ フィンガー、ロック マイ ソウル、女医振るコンビネーション、Groove II、ピーナッツ ベンダー他。</p> <p>■『大学教育から公開講座・ワークショップへ伝えられるもの -学生の「ジャワ島のガムラン」音楽受容へのアプローチを中心に-』（単著）2007（平成 19）年 3 月 福井大学教育地域科学部博物館学研究室 全 52 頁（p p.39～52）</p> <p>大学の授業において行った「ジャワ島のガムラン」音楽の学習で得ることができた教育内容や教育方法の成果を検討し、地域貢献の一つである大学公開講座やワークショップにおいて、一般参加者に伝えることができる有効な要点は、学習方法に関して 2 点（①合奏→パート練習のサイクルをくり返す、②個人練習は合奏後に行う）と、演奏へのアドバイスに関して 8 点（音楽構造や音楽の構成の告知、合奏における合わせ方、演奏内容に対応させた楽器のグループ化、五線譜ではない図式化した楽譜の提供等）を明らかにした。</p>
<p>教育実践記録等</p>	<p>■『すごいぞ「イマドキの音大生」-創作指導法の授業より-』（単著）2014（平成 26）年 2 月大阪音楽大学教育研究論集 創刊号 大阪音楽大学教職研究会（p p.47～53）</p> <p>音楽大学の教材研究（創作指導法）の授業における、表現活動としての創作指導をめぐる学生の様相を明らかにすることを目的とした。その結果、①創作の授業映像を基にした事例研究では、子どもの興味・関心のあり所と授業者の子どもへの接し方についての問題点を的確に指摘し、創作指導の要点を把握していた。②環境音の聴取と描画では、採集した音は描画によってイメージ化され、採集場所の景色や匂いをも描画とともに配色や画面構成を考えて表現している。③楽器制作と音楽づくりでは、特に楽器づくりへの関心が強く、自分では不得意な工作も、他の学生に教えてもらいながら完成させていた。音楽づくりでは即興演奏が得意であった。</p> <p>■『「音」を単元とした音楽科と図面工作科との合科による協働授業の試み-「土笛づくりを中心に-』（単著）2010（平成 22）年 3 月学校音楽教育研究第 14 巻 日本学校音楽教育実践学会（p p.197～198）</p> <p>本論では授業実践の中の「土笛づくり」に焦点を当て、協働授業に対する学生の評価と授業者の実践上の要点を明らかにすることを目的とした。その結果、教育的意義と授業内容に高い評価を示した。しかし、授業者の立場としての子どもに対する学習評価への不安と困難さを多く感じていた。また、「土笛づくり」では、教材や指導内容の評価は高いが、土笛を鳴らす技術面の指導に問題が残るとの評価があった。合科協働授業の実践上の要点は、①授業者の相互理解、②学生側の授業評価の分析、③授業中の授業者相互の意識と行動内容、④授業計画立案に要する時間の確保、の 4 点が明らかになった。</p> <p>■『楽譜を媒介としない音楽指導の様相—アフリカの太鼓「ジェンベ」の指導を通して』（単著）2009（平成 21）年 3 月 学校音楽教育研究第 13 巻 日本学校音楽教育実践学会（p p.69～70）</p> <p>アフリカの太鼓「ジェンベ」の音楽指導において、楽譜を媒介としない音楽指導の様相を、ジェンベ演奏家・指導者のジェセフ・ンコシの指導を通して明らかにすることを目的とした。その結果、精神面では、演奏に向けての心構えとして、「先ず楽しく、勉強は後で。」技術面では、段階的にまねる→まね+リズムの積み上げ→生徒の基本リズムと指導者のアドリブとのアンサンブルが行われた。指導内容では、音色創出の重要性の理解、アンサンブルにおけるコミュニケーションの自覚。</p>

<p>その他</p>	<p>■『音楽科学生におけるガムラン音楽受容へのアプローチの様相-ジャワ島のガムランの場合-』（単著）2008（平成 20）年 1 月 福井大学教育地域科学部紀要VI 芸術・体育学・音楽編第 38 号（p p.1～16）</p> <p>初めてガムラン音楽の演奏を体験した音楽科学生が、ジャワ島・ガムラン音楽をどのように受容しようとしたのか、その受容のアプローチの様相を明らかにすることを目的とした。その結果、受容へのアプローチは問題解決の学習そのものであり、その様相は次の 3 点にまとめることができた。</p> <p>① 響を捉えることができないことから始まる。②演奏しながら自身の演奏経験との格闘(問題解決の活動) が続く。③ガムラン音楽の受容が促進した 6 つの行動による効果</p> <p>■『新しい教科書。こんな授業ができる！』（単著）2014（平成 26）年 3 月 Spire_M 小学校版。教育出版編集局編。教育出版全 15 頁（p p.8～11）</p> <p>平成 27 年度より新しい小学校音楽教科書を使用することになる。</p> <p>教育出版発行の小学校音楽教科書の著者として、教科書を有効に使い、子どもの学習意欲と効果を最大限に引き出すための具体的な活動を、実践事例を元に項目別に整理して解説した。特に、複数学年に渡って同じリズムを基に学習内容を積み上げていく活動や、教師用指導書の C D の有効な使い方まで言及した。</p> <p>■『うたは心をつなぐ-元ちとせのメッセージをきっかけに』（単著）2011（平成 23）年 4 月 小学校音楽教科書音楽のおくりもの 4 年、教師用指導書研究編、教育出版（p p.1～20）</p> <p>小学校音楽教科書 4 年生用のグラビアに掲載された元ちとせの小学生へのメッセージを、「自分の中の（島唄）さがし」、「視点を変えると」、「心をこめてうたう」の三つに立てて、この頁を授業するための教材研究として読み解いた。また、メッセージの主題を「うたは心をつなぐ」とし、気持ちを込めて歌ううたは人から人へつながり、うたう気持ちは心から心へと伝わり、ここに歌い継がれたきたうたを音楽の授業で扱う意義があると述べた。</p> <p>■『音楽は世界を結ぶ（自分と世界がつながる時…）-ヨーヨー・マのメッセージをきっかけに』（単著）2011（平成 23）年 4 月 小学校音楽教科書音楽のおくりもの 6 年、教師用指導書研究編、教育出版（p p.1～20）</p> <p>小学校音楽教科書 6 年生用のグラビアに掲載されたヨーヨー・マの小学生へのメッセージを、「よみがえる思い出」、「世界共通のもの」、「自分の生活から世界をつなぐ」の三つに項目を立てて、この頁を授業をするための教材研究として読み解いた。また、メッセージの主題を「自分と世界がつながるとき」とし、音楽を体験するということは、世界中の人と自分自身がつながることができる、大きな出来事だと述べた。</p> <p>■『子どもの秘めた感性と行動力-土笛からむすばれた縁-（音楽×学び 連載④）』（単著）2011（平成 23）年 9 月 Spire_M 小学校版。教育出版編集局編。教育出版全 20 頁（p p.14～17）</p> <p>古代楽器「土笛」の制作を含む授業実践を朝日新聞や NHK テレビ、ラジオ等が全国版で紹介したことことから派生した、広島市の小学校児童との交流・修学旅行での出会いや、一般の人々との長期間にわたる交流を中心に紹介した。特に、日常の学校生活では知ることの出来なかった子どもの感性と行動力を分析・詳述した。</p>
------------	--



	<p>■『子どもの意気込みと、こんなやさしさ。「土笛」づくり…始めた子ども（音楽×学び 連載③）』（単著）2011（平成 23）年 3 月 Spire_M 小学校版。教育出版編集局編。教育出版全 20 頁（p p .2～5）</p> <p>1985 年、古代楽器「土笛」との出会い以来、22 年間毎年継続して行った小学校における授業実践の概要と共に、子どもが何故「土笛」に惹かれるのかを、「土笛」の制作過程毎に子どもの活動とその心情を中心に分析、詳述した。同時に新しい土笛のつくり方や独自に開発した野焼きの写真等を掲載して、現職教員の新たな授業実践への参加を期待した。</p> <p>■『子どもだからこそ、ワカルものがある！-楽しさへの予感…「ケチャ」…-（音楽×学び 連載②）』（単著）2010（平成 22）年 10 月 Spire_M 小学校版。教育出版編集局編。教育出版全 16 頁（p p .8～11）</p> <p style="text-align: right;">著 者 が</p> <p>ケチャと出会い、ケチャの授業実践を始めることで起こった様々な出来事を通して知ることができた、子どもの感覚や興味関心のあり所や子どもなりの論理等、授業実施を通して分析した「子どもの世界」を詳述した。また、ケチャのみならず日本の民族音楽を含む世界の諸民族の音楽の学習には、音楽そのものの理解（テキスト）と文化としての音楽（コンテキスト）の相互往來の必要性を提案した。</p> <p>■『子どもから学ぶ-自身が変わるために、授業が変わるために-（音楽×学び 連載①）』（単著）2009（平成 21）年 10 月 Spire_M 小学校版。教育出版編集局編。教育出版全 20 頁（p p .10～11）</p> <p>筆者自身の小学校教員時代に、子どもの現実の姿を見ないで、大きな失敗をした実践事例を元に、「子どもから学ぼうとしない限り教師自身は変わらない」と教育実習に行く学生に話した林竹二の教育理念を紹介した。子どもの事実一つ一つがどのような意味を持つのかを、今こそ教師は考える時ではないか。子どもから学ぶということが、これからの授業づくりの大きなヒントになると提言した。</p>
--	---



横山 政夫（よこやま まさお） 講師

担当科目

教職入門Ⅰ 教職入門Ⅱ 道德教育論 特別活動の指導法 教育実習の指導  
生徒指導論Ⅰ（教育相談を含む。） 教職実践演習（中・高） 同和教育論

所属・職位	大阪音楽大学 音楽学部音楽学科 講師
学位	修士（学校教育学）
学歴	1972（昭和47）年 神戸大学教育学部英語科 卒業（教育学士） 1995（平成7）年 兵庫教育大学大学院学校教育研究科幼児教育専攻 修了 修士（学校教育学）
主な職歴	1972（昭和47）～1977（昭和52）年 茨木市立玉島小学校 教諭 1977（昭和52）～1989（平成元）年 茨木市立北中学校 教諭 1989（平成元年）～1999（平成11）年 茨木市立天王中学校 教諭 1999（平成11）～2009（平成21）年 茨木市立西陵中学校 教諭 2007（平成19）年～現在に至る 大阪音楽大学 非常勤講師 2007（平成19）年～現在に至る 国立大学法人大阪大学 非常勤講師 2010（平成22）～2013（平成23）年 京都橘大学 非常勤講師 2014（平成26）年～現在に至る 大阪音楽大学短期大学部 教授
専攻（専門分野）	生徒指導論 特別活動論 道德教育論
担当科目	「教職入門Ⅰ」「教職入門Ⅱ」「特別活動の研究」「生徒指導論Ⅰ（教育相談を含む）」 「教育実習の研究」「教職実践演習（中）」「教職実践演習（中・高）」「同和教育論」 「道德教育論」
研究テーマ	教師の職能成長やストレス低減、バーンアウト予防を可能にする、教員のソーシャル・キャピタル（社会関係資本）を研究している。
教育方針	1. 正確な教育情報を知ることによって、「わかつたつもり」から脱出する。 2. 問題の現象だけに目を奪われるのではなく、背景に目を向け、その上で解決策を考えることを学ぶ。 3. 問題を様々な視点からとらえることを学ぶ。
所属学会・団体等	日本教師教育学会

<p>最近の業績</p> <p>著書</p>	<p>■『21世紀を生きる子どもたちからのメッセージ』（共著）2010（平成22）年三学出版刊（担当部分 pp.36～122）</p> <p>担当部分概要：「第1章調査が語る『学校は今』（pp.36～122）。</p> <p>大阪府下の小中高生対象に2005（平成17）年に実施したアンケート調査の中学2年生のデータをもとに、不登校、いじめ等の生徒指導上の諸問題とその解決の方向や、生徒会活動、行事、学級活動などの特別活動が、コミュニケーション力の育成や「自己理解」「他者理解」「集団とかかわる力」「共感能力」などの道德性の育成に有効であることや、自尊感情を育てる部活動のあり方など論じた。また、上記の分析を裏づける中学校の実践事例（特に、教科と連携した「特別活動」の実際（「総合的な学習の時間」の実践）、課題を持つ生徒が行事に参加できる工夫、生徒間の「共感性」を高める工夫など）、を紹介した。</p> <p>著作者氏名：板倉史郎、大前哲彦、佐伯洋、佐々木温子、新主寿雄、前島一誠、松井登、守野美佐子、柚木健一、横山政夫、米山幸治</p>
<p>教育業績</p>	<p>■『いじめ』講義の構想』2014（平成26）年大阪音楽大学研究論集 創刊号（pp.31～46）</p> <p>「いじめ」問題の講義の構想として、次の3点をあげた。第一に、子どものいじめ問題の背景となっている、大人社会の「人権侵害・いじめ」の広がりについて検討を加えた。第二に、これまでのいじめ研究を整理した。第三に、いじめ問題解決に苦闘した中学校の実践を紹介した。いじめは、加害者被害者間だけの問題ではなく、クラス全員が様々な影響を受けており、教師はいじめ解決の活動を生徒とともにすすめ、集団の中に道德性と自治の力を育てる指導が求められている。被害者・加害者・観衆・傍観者それぞれの支援と指導のあり方、学級活動・行事を通して、自治と道德性を育成する学級指導を紹介した。</p> <p>■『「つながり」を求める子どもたち』2012（平成24）年奈良県民教育研究所『奈良教育フォーラム第15号』（pp.27～35）</p> <p>2005（平成17）年12月～2006（平成18）年1月にかけて大阪府下の子ども（小2、小5、中2、高2）を対象にアンケート調査を実施した。その中の中学2年生のデータをもとに、中学生の諸課題－学習のあり方（習熟度別授業や塾）、部活動のあり方、特別活動の果たす役割、コミュニケーション能力の育成、社会貢献を重んじる道德性の育成など－について、子どもたちの願いに応える教育実践のヒントや大人のサポートについて考察したものの。</p> <p>■『西陵文化・合唱が響く学校づくり』（共著）2006（平成18）年季刊『人間と教育』第49号（pp.108～113）</p> <p>活発で旺盛な生徒会活動と「合唱」を中心にした豊かな表現活動の展開を通じて、「自己理解」「自主性」「他者の尊重」「集団とかかわり」などの道德性などが育成された中学校教育実践を紹介。音楽科、総合的な学習の時間及び特別活動を有機的に関連させ、個人及び集団の道德的実践力を高める教育課程の創造について紹介したものの。</p> <p>著作者氏名：井場節子、横山政夫</p> <p>（横山が原案を書き、井場が修正を加えたため、担当部分抽出不可能）</p>

<p>その他</p>	<p>■「つながりを求める子どもたち－大阪の子ども調査に学ぶ－」（口頭発表）2011（平成23）年奈良教育シンポジウムにおける研究発表</p> <p>2005（平成17）年12月～2006（平成18）年1月にかけて大阪府下の子ども（小2，小5，中2，高2）を対象にアンケート調査を実施した。その中の中学2年生のデータ分析を報告した。習熟度別授業、塾、部活動、特別活動などの分析を通じて明らかになったことは、競争や能力主義に傷つき、「孤独」や「居場所のなさ」に悩み、友だちとの「つながり」を求めていることである。「つながり」を大切にする学習、部活動、特別活動が不登校感情を軽減し、コミュニケーション意欲や能力を高めることが明らかになった。</p> <p>■「格差社会の陰」－第3回大阪子ども調査結果の報告－（口頭発表）2006（平成18）年 日本教師教育学会における研究発表</p> <p>2005（平成17）年12月～2006（平成18）年1月にかけて大阪府下の子ども（小2、小5、中2、高2）と教師、保護者（小5、中2）を対象にアンケート調査を実施した。生徒会活動、学校行事、学級指導の活性化によって共感的な生徒集団を育成することが、不登校感情の軽減、いじめ問題の減少、コミュニケーション能力の向上、社会貢献を重んじる勉強観の育成といった道徳性の向上に有効であることが明らかになった。また、共感的な生徒集団の育成に取り組んでいる中学校の実践事例（「総合的な学習の時間」の展開）を紹介した。</p>
------------	---